



## 40年経っても心に響く二人の言葉

山岡育英会 理事  
吉田 英生

筆者が奨学生のみなさんの年ごろだったのは40年も前です。以後、自分を折に触れて支えてくれた言葉は枚挙に暇がありませんが、ここでは今もなお心に響く二人の言葉をご紹介します。

### 運転免許試験場でのおまわりさん(1978年)

幼稚園の卒園式から大学院の卒業式まで、園長、校長、学長の諸先生から何度か贈られた言葉があります。しかし、今となっては、残念ながらその一言さえも覚えていません。ただし、ひとつだけ例外があります。それは、府中にある運転免許試験場で免許を取得して教習生を卒業するときのことでした。

言葉の主は、白髪まじりのいがぐり頭でおおきな熊さんのようなおまわりさんです。そのおまわりさんは、運転免許証をもらって教室を出る直前のわたしたちに次のように短く語ったのです。

「あなたたちはこれで運転免許証をもらって一般の道路に出て行く。これまでは、青信号は進め、赤信号は止まれだった。しかし、これからはそうではない。いったん道路に出たらいちばん大切なことは、事故から自分を守りまた相手を守ることだ。そのためには、青は必ずしも進めではない、赤は必ずしも止まれではない。青だって止まらなければならないときがある、赤だって進まなければならないときがある。以上、くれぐれも気をつけて。」

そう語り終わったとき、教室のみんなは思わず拍手をしました。目頭をおさえる人さえいました。爾来この贈られた言葉はいつときも忘れることなく、人生という道路を運転する筆者を支えるものともなっています。



### 高校野球育ての親、佐伯達夫さん(1980年)

1980年3月22日、日本高等学校野球連盟(高野連)の会長だった佐伯達夫さんが87歳で亡くなりました。ここに紹介するのは、翌日の毎日新聞の記事と余録で知った佐伯さんが69歳(1961年)のときの言葉です。当時、高校生選手とプロ球団との交渉は、公式戦が終了し退部届を提出した後に許されていたのですが、ある高校の投手が夏の甲子園前に交渉していたことが発覚、高野連が同校を一年間の出場停止にしました。これに対し人権擁護団体が「高野連の制裁は厳しすぎる」と訴えたのを機に国会でも取り上げられ、佐伯さん(当時は高野連副会長)は衆議院法務委員会に参考人として呼ばれました。そして、議員の一人が「教育者でない者がなぜ、教育の一環である高校野球の指導者をしているのだ」と詰め寄ったところ、佐伯さんは「学校の先生だけが教育者やおまへんで」と並みいる議員をにらみつけたということです。

この二人の言葉のトーンは異なりますが、その根幹にあるのは、塩野七生さんが述べる以下のことではないかと思うのです。「修羅場は、人間の生きるところあらゆる場所にある。修羅場をくぐった体験をもつ者は、背水の陣でことにのぞむ苦しさも、また快感も知っている。そして、必殺の剣とは、いつ、どこで、どのように振るうものかも知っている。こうなると、同じ一行の書き文字も、同じ一句の話し言葉も、そこに凝縮された『力』がちがってくる。」(「男たちへ フツウの男をフツウでない男にするための54章」より)